



N038 発達障がいのある子どもへの理解と対応

— 教育センター公開講座から part4 —

今回も前回に引き続き、事例をもとに対処を考えてみます。

【事例3】

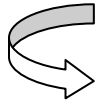
小学5年生 男児 たけしくん

- 授業中、先生が書いた黒板の文字を書き写すのに、とても困難を抱えていた。
- すべてひらがなで書いていた。
- 廊下に彼の作文が掲示されていた。
 - ・うんどうかいのおもいで 佑とう たけし



なぜできないのだから。ぼくはダメな奴だ。

- ・この子の本当の名前は？
- ・先生に真っ先にしてほしいことは？



“学習障がい（LD）のうち「書字表出障がい」” という視点から考えてみると…



<特徴>

- ・読めない文字を書くことは難しい。
 - しかし、読めても書けない場合もある。
 - 学習指導の順番（読む・書く）を考えておく意味で、読字障がいと併存しているかどうかを鑑別しておく必要がある。
- ・書字の障害を考える時、発達性協調運動障がいや不器用さで上手に書けないといった字形の拙劣さと区別する。
- ・書字の躓き
 - 音韻処理過程の障害
 - 音韻認識の躓きから音読できず、音声的に正しく綴る能力が低下する。
 - 視覚情報処理過程の問題
 - 形態の認識の誤りや記憶の躓きなど



《たけし》

- ・名前は、さとうたけし。
- ・さとうの“さ”は、「イ（にんべん）に右か左か」思い出せない。



《教師の対応》

- ・名前を漢字で書こうとしたことをまずは認め、さとうの“さ”は、「イ（にんべん）に左」と教える。
- ・作文の名前を訂正させる。⇒ 誤りのまま掲示して他児の目に触れることがないように配慮する。